

定本

橫光利一全集

定本
横光利一全集
第十卷

河出書房新社

定本 橫光利一全集 第十卷

昭和五十七年四月二十日 初版印刷
昭和五十七年四月三十日 初版發行

著 者 橫光利一

校訂者 井上 謙

發行者 清水 勝

發行所 株式會社 河出書房新社

東京都澁谷區千駄ヶ谷二―三―一二

電話 四〇四―一二〇一（營業）

四〇四―八六一一（編集）

振替口座（東京）〇一〇八〇二

印刷 多田印刷株式會社

製本 小高製本工業株式會社

Printed in JAPAN

© 一九八二

目次

春園	3
由良之助	247
シルクハット	276
王宮	298
實いまだ熟せず	315
秋	490
祕色	514
睡蓮	525
天城	540
終點の上で	565
三つの記憶	587
解題 編集ノート 井上謙	595

定本 横光利一全集

第十卷

春園

林の樹の芽はまだどのも出てゐない。葉を落してしまつた木立は枝枝をさし交して竝んでゐる。残雪の底から逃げ水の流れる音も聞えて来る。三日前にヨーロッパから歸つて來てホテルに休息してゐる泰太郎は、この靜かな野の風景の後に、急にこのとき鮮かに立ち現れた富士を見た。今まで靴の泥を枯草ににじりつけつつ、路傍に咲きかかつた紅梅の目にあたつてゐるのを眺めたり、蒲の穂を揺るがせて飛び立つ群雀を眺めたりしながら歩いて來たが、長らく忘れてゐた富士の姿を見ると、

「美しいね。これは、これは。」

とかう云つて、しばらくそこから立ち去り難かつた。しかし、彼はこの景色をここで一度前に見たことがあつた。それは三年前のことである。見てゐるうちに記憶はだんだんそれからそれへと逆のほつた。すると、不意に彼はある一つの出來事を思ひ出した。

當時彼は種々様々な希望をこの世界に持つてゐた。家督を弟に譲つた代りに父から十萬圓を貰つたばかりの彼は、その中の三萬圓を最も有効なことに使はうと思ひ立ち、先づ何はさておき海外旅行を企てた。さうして、ある日この附近の松下といふ實業家の所へ友人の安藤につれられてフランス行に便利な紹介狀を貰ひに來た。泰太郎の軽い出來事といふのはその歸りの道であつた。その日の景色もこのやうに美しかった。松下家から出て來てここまで來たとき、女學校の教師をしてゐる安藤は、どういふつもりか突然悲痛な顔をするゝ幾度も溜息をつきつき歩いてゐてから、思ひ切つたといふ風に泰太郎に教へ子のある悲しい話を打ちあけた。

「君、僕のクラスに十五になる娘の子がゐるのだが、その子が今度五百圓で賣られて行くのだよ。今五百圓さへあれば、何とかその子を救つてやれるのだ。君、五百圓僕に貸してくれないかね。さうしたら、君がその子を救つたといふことにしておくが、どうだ。金は出せられないか。」

何となく安藤はさう云ふために泰太郎をつれて來たやうな形であつた。しかし、泰太郎はその話を聞くと、その話を耳にしたといふ一事で自分と全く關連のないことだとは思へなくなつて來た。

「僕がかういふのも、とても世話して駄目だといふ子ならまア捨てておくけれども、その娘は顔も美しいし頭も良いのだ。おまけに百姓の家に預けられてゐる里子なんだが、良かつた家元が潰れて送金が出来なくなつたといふところへ、養ひ親がまた病氣で動けないといふんだからね。」

泰太郎は今父から十萬圓も貰つたばかりの自分のことを考へた。その上、今その金を自分が自由に使へる時であることも考へた。さうして、その悲しい娘の話を聞かされたもののうちで、今

自分が一番自由に金を出し易い立場にあるものだと考へた。

「それぢや、出すよ。しかし、君に貸すといふことにしよう。僕が救つたといふ形になつちや、それや困るよ。」と泰太郎は云つた。

「いや、それや、僕はそれでもいいが、人を救ふといふやうなこんな事柄は、自分一人のことにしておきたくないんだ。そんなことなら何もわざわざ君に頼まなくとも誰にだつて頼めるよ。とにかく、君にも善行をしたと思つてもらひたい必要が、この場合はあるんだからね。」

「まア、それはどうでもいいとして、それぢや貸さう。」

外國へ行く前には誰でも金を矢鱈に使ひたくなつて困るものだが、泰太郎も何の躊躇もなく次の日安藤に五百圓を渡した。しかし、彼が五百圓出したばかりに問題はそれだけではすまなくなつて來た。娘の家は五百圓さへ手に入れば、娘を家から出してどこへなりと女中に出すことが出来るやうになるのであつた。ところが、泰太郎の方では、その金さへ自分が出せば、娘がそのまゝ今までの家にゐられるのであらうと思つてゐたのである。泰太郎と娘の間を奔走した安藤は、ある日また泰太郎の所へ來て、

「どうだ、君、一度その娘を見てみないか。」と奨めた。

泰太郎は「いや見ない。」と答へた。

「どうしてだ。」

「見ない方が便利ぢやないか。」

泰太郎はわざとそのときそんなに滑稽に答へたのを覚えてゐる。彼としては、娘と自分とのそ

れから起る煩雜な事柄から、一切手を切つてしまひたかつたのである。それ以上の親切を盡すことは、その娘が大きくなつてからも自分が生涯その女性の恩人となることだつた。それは一生その婦人に恩を賣つて自分に縛りつけることだと思つた。彼は自分にそれほどにする立派な人格があるならそれも良いことだと考へたが、何しろまだ若くて恩を賣るほど自信を自分に感ずることが出来なかつた。

「僕はもう五百圓も出したのだから、後は君が何とでも工夫してくれば良いだらう。僕は五百圓やそこらの金で、その娘を買つたんだと思ふことだけで、今は少々氣がさしてゐるんだからね。僕は今は、五百圓出したことで、少し後悔して來てゐるほどだよ。」と泰太郎は安藤に云つた。

「しかし、全然顔も見ないといふのも、金の出し甲斐がない。」

「いや、見ない方が出し甲斐があるよ。もし見てこの子が大きくなつたら、なんて思ひ出した日によ、おちおち勉強も出来ないどころか胸算用しないものでもないからな。」

「ところが、それが胸算用したくなるやうな子なんだよ。」

安藤はもうその後相手は野暮な泰太郎だと思つたらしく苦笑をもらして黙つてしまつた。

「とにかく、その娘のことに關しては、一切僕に以後云つちやいけないよ。その娘にも僕のことを絶対祕密にして、云はないやうにしておいてくれ給へ。それだけは、良心にかけて守つてゐてくれないと、相互に弱るときが来るからね。定つてることだ。」

泰太郎がかう云つてから、以後彼と安藤とはもうこの話のことでは逢はなかつた。泰太郎はそれから間もなくフランスへ行つたのであるが、泰太郎の金を出した娘の名さへ、彼は訊ね忘れて

まだ知らぬほどだった。安藤からは二三度バリの泰太郎に手紙は來た。けれども、手紙の中には一度も娘のことは書いてなかつた。そのうちに彼はその娘の存在について全く忘れてしまつたと云つても良い。

三年目の暮も押し詰つたころ、泰太郎はバリから東京へ歸つて來た。東京へ着くと彼は急に武藏野の中の人のまだ手を入れぬ雑木林が欲しくなつて毎日ぶらぶら郊外を歩いてみた。林の中を少し開いてそこへ小さな家を建て、野菜を自分の手で造り、靜かに自分の勉強を試みたくなつたのである。この考へはまだ金の餘つてゐる泰太郎には、いつからでも出来ることであつた。この日も彼は雑木林を探しに野の方へ出て來てみたのだが、フランスへ行く前に安藤につれられて紹介狀を貰ひに來た松下家の附近を探す氣になつて、何心なく、安藤の教へ子のために五百圓を出さうと考へたその場所へ出てしまつたのである。

泰太郎は枯草の上へ腰を降り、兩手で足を組んで、當時よりも一層美しく見える冬木立の、うす紫色に霞んだ梢を仰いでゐた。すると、ふとまた彼は、今見てゐる一帯の林を買つてみようと思つた。どうせ買ふならむかし自分が善行をした思ひ出のある土地の方が氣持ちが良かった。殊に今の彼はヨーロッパへ行く前とは、世の中に對する考へも、物の見方も全くがらりと變つてしまつてゐた。自分の過去の出來事なども早やどうであらうとかまはない。喜びも悲しみも彼が日本で出逢つたこと以上に、はるかに澤山嘗めてしまつて來たのである。

泰太郎は立ち上つて雑木林の外をめぐつてみた。およそ眼で計つて六百坪もあらうか。更に彼

は林の中へ這入つてみると熊笹が密集してゐる中に二丈ほどの細い雑木がまた密集して生えてゐた。ふんとする朽葉の匂ひも冬の匂ひであつた。しかし、何よりその土地が高臺で平坦なのと、松下家につづいた土地であることが彼の氣に入つた。

「よし。もうこれを定めた。」

かう思ふと泰太郎には金のことなどいくら高からうが、ただその土地を買へればそれで良くなつて來た。彼はすぐその林の持主を附近の農家で訊ねてみて、それから教へられた地主の所へ出かけていつた。地主は丸く坊主のやうに頭を剃つた五十過ぎの男であつたが、一風變つた人と見えて笑顔を一つも見せなかつた。しばらく彼は泰太郎の顔を見てゐてから何の返事もせず一寸小首をかしげて黙つてゐた。

「いくらでもいいですよ。安ければ結構ですが、高ければ高くてもいいですよ。一つ僕にあそこを分けてくれませんか。」泰太郎はこのやうに無茶苦茶な交渉を先づしてみた。

「あそこはもうすぐ電車が通りますのでね。」と地主はうすぼんやりした顔をして答へた。「電車が通るのはいいやだな。喧しいですからね。それぢや、一寸待つてください。」

泰太郎は地主と全く違つた考へから首をひねつた。

「いや、それや、喧しいほどのことはありませんよ。三町も離れてゐますからね。」と地主はまた云ひ直した。

「しかし、電車が通ればごちやごちや家が建つやうになるでせう。家が傍へ立つやうぢや困るんですよ。うるさくなつちや、また別の土地を買はなきゃならなくなりますからね。」

すると、どういふものか、地主は泰太郎に返事をする代りに、傍へひよろひよろ歩いて來た四五歳の子供を見ると、突然その子の頭をかかへて「これや。」と叫んで足をはだかつた。地主にとつてはおどけたつもり of 恰好も、子供にとつては嘔鳴りつけられた形となつたのでその子は急に泣き顔になつて來た。

「ははははは。」

地主は大きな聲で笑ひ出した。泰太郎は一瞬間ふつと春風を送られたやうな氣持ちになつた。土地賣買の交渉の最中に急に他家の子供にからかふ男が地主だとは、考へても泰太郎は健康な感じがした。

「値段はしかし幾らほどですか。」

「十五圓にしてくださいませう。電車が通ると定つたのは一週間前ですから、まだよく私の方も定めてないのですよ。」

十五圓なら六百坪で約一萬圓ほどであつた。それなら彼にも高いとは思へなかつた。

「今買つとかれる方がお得ですよ。もうすぐ二十圓を越しますからね。今年いっぱい越しますよ。」と地主は云つた。

「それでは一つ賣つてください。松下さんの屋敷もお宅んだつたんですか。」

「さうさう、あれもさうです。」

かういふ簡単なことで泰太郎と地主との間の話はまとまつた。この時間はおよそ五分もたつてゐなかつた。もしこれが正式に土地賣買の交渉ばかりであつたならいま一日時間を兩方で空費し

ただらう。それが、地主の頓狂な子供との遊戲が直ちに自分の警戒心を拭き拂つたのだと思ふと、その日は泰太郎も氣持ちよくそこから歸ることが出來た。

泰太郎は自分の職業を今は持つてゐなかつた。前にはある大學の哲學の教師をしてゐたこともあつたが、外國で切手の蒐集家から蒐集方法を習つてからは、それで優に生活の出来る自信がついて來た。

各國の切手の新しいのと古いのとを集めれば凡そ十萬種類もある。その種類の中からこれは美しいと睨んだものを抜きとつて、外國の切手會社へ送れば運良くば一枚一圓で買つたものでも、幾百圓の値の出る場合もある。各國にはこの切手の購買組合があるから賣れないといふことは絶對に無い。日本でこそ切手の蒐集家は六百人ほどよりないが、アメリカ一國だけに一千萬人の會員がある。世界全部の會員を集めればその數は計り知れなかつた。云はば、泰太郎の商賣は世界相手の貿易商であつた。しかし、彼の取引會社はフランスが主であつたからあまり忙しくはなかつた。ただ難しいのは、切手を一眼見て直ちにその眞價を見抜く審美眼と、その切手の相場値段を知つてゐることであつた。

泰太郎は勉強の片手間にこのやうなことをしてゐたから、比較的上流階級の家庭に出入する機會が多かつた。彼はこれらの家庭をときどき廻つては互に蒐集してゐる切手を見せ合ふのだが、これも泰太郎はあまり熱心な方ではなかつた。

泰太郎は帝國ホテルから靈南坂の上の小さなホテルに變つてから、安藤に一度遊びに来るやうに手紙を出した。しかし、安藤からは返事も來なかつた。泰太郎はある日、自分の買った土地を見に郊外へ出かけていつた。そのとき、丁度出かけようとしたところへ、まるで見違へるやうに年よりじみた恰好に變つてゐる安藤がやつて來た。泰太郎が海外から歸つて以來初めて逢ふのである。

「しばらくだね。僕はこなひだ土地を一才買ったのでね、このごろは毎日そこへ行つてゐるんだよ。今日もこれから見に行くところだ。しかし、まア、上り給へ。」

「ぢや、一緒に行かう。」安藤は來るなりまた椅子から立ち上つた。

「行つてくれるか。少しまん中の樹を截らしてあるので、截りすぎても困るんだ。まん中へ家を建てるもんだから。なかなか忙しいんだよ。」

泰太郎は安藤と連れ立つてドアの外へ出た。すると、戸の外に一人だと思つた安藤以外に、十九か二十歳かと思はれる娘が一人立つてゐた。身なりは普通の黒いビロードの服を着てゐたが、眼鼻立ちの良く整つた美しい顔の少女だつた。泰太郎は見るともなくその娘を見ると、娘は黙つてお辭儀をした。泰太郎は「やア。」と會釋をしたきりで安藤と話しながら歩いていつた。

三人は廣い通りへ出た。そこで泰太郎は自動車拾ふと郊外の自分の買った土地の方へ走らせた。自動車の中でも泰太郎と安藤の話は、長い間別れてゐた話とも思へないとりとめのない話ばかりが續けられた。すると、一里ほど走つたところ突然安藤は泰太郎に、

「さうだ、君に紹介するのを忘れてた。この人は眞鍋美紀子さん。」と少女を紹介した。

「どうぞ宜しく。」美紀子と云はれる娘ははつきりとした聲で云つた。

「學べ、美紀子といふんだ。」

安藤の冷やかすやうな笑顔に泰太郎も低く笑つたきりで、しばらく黙つて自動車に揺られてゐた。すると、また安藤は一層突飛に美紀子の片肩に手をかけた。

「この子、君、どう思ふ。僕は結婚したいんだが、云ふことをきいてくれないんだよ。しかし、こつちに誠意があれば、いいだらう。悪いことぢやないだらう。」

「分らないね、君の云ふこと。」

ふざけたやうに見える安藤に眞面目に答へる氣も起らず、さう泰太郎は無造作に答へたまま笑つて二人を眺めてゐた。

「もう分つてゐるだらう。云はなくなつて。」

「何だかどうも、様子がへんだね。」

「へんだへんだ。僕も困つてしまつたんだよ。どうにもならなくなつて、それで實は今日來んだが、君に一寸訊きたいことがあるんだよ。」

泰太郎は、安藤が自分の所から遠ざかつてゐたのはこの戀愛のせゐだつたのかと思つてゐると、今までにやにや笑つてゐた安藤は急に澁りきつた苦しげな顔になつて、

「もう、よさう。こんな話は面白くなくなつた。」

と自分から云ひ出したにも拘らず、ぐらりと變つてむつとりした。

「をかしな男だね。三年も逢はぬと君でも變るもんだなア。」